

## 在宅生活をおくるパーキンソン病患者のコロナ禍における 行動制限緩和後の思いの変化

森田久美子<sup>1)</sup> 田邊萌絵<sup>1)</sup> 長谷川愛理<sup>1)</sup> 山本祐也<sup>1)</sup> 東口亜耶<sup>1)</sup> 加藤藍子<sup>1)</sup>

1) 鳥取医療センター パーキンソン病センター (1 病棟)

### 要旨

先行研究<sup>1,2)</sup>より、パーキンソン病の患者が何に重きを置いて在宅生活しているのか調査した結果、男性は「趣味」が、女性は「孫」「家庭」「友人との交流」など、他者との関係性に関わるものが共通のキューとして多く挙げられた。昨年度、先行研究<sup>1,2)</sup>と比較検討し、パーキンソン病患者が在宅生活で重きを置いていることを明らかにするため調査した結果、キューの内容が「家族」へと変化が生じていることが分かった。

今回の研究では、COVID-19が2類から5類へと移行されたことに伴い、SEIQoL-DWを用い患者が行動制限緩和後の在宅生活において、重きを置いている思いの変化を明らかにすることを目的とした。その結果、A氏はキューの内容、B氏はQOL-Indexの低下等に変化がみられた。在宅生活では少なからずコロナ禍の影響を受け、生活を継続していくためには、QOLやADLの維持とともに、社会とのつながりが重要である。今後は在宅生活の充実に向け、地域との連携を行い、継続した支援が必要と考える。鳥取臨床科学 14(1,2), 41-46, 2025

### Key Word

コロナ禍, 行動制限緩和, SEIQoL-DW, 在宅での思い, パーキンソン病

### はじめに

パーキンソン病は静止時振戦, 強剛, 無動, 姿勢反射障害の運動症状を特徴とし, うつ, 睡眠障害, 認知症などの非運動症状も高率に合併する神経難病である。パーキンソン病の進行度分類には「ホーン・ヤールの重症度分類」が用いられる。「ホーン・ヤールの重症度分類」は, IからV度に分類され, V度が最も重度を示す。

A病院パーキンソン病センター(以下PDセンターとする)では, パーキンソン病短期集中リハビリで入退院を繰り返す患者が多くを占めている。中でも, 患者の多くは姿勢反射障害がみられるようになったヤールIII度以上の患者である。ヤールIII度

からは, 日常生活に介助が必要となる場合が多い。3年前より, SEIQoL-DWを用いて, ヤールIII度で入退院を繰り返す患者が何に重きを置いて在宅生活しているのかを調査した結果, コロナ禍での生活様式の変化と共に思いの変化もみられた。

このため本研究では, 約3年にわたるコロナ禍での生活が緩和されたことにより, パーキンソン病患者の思いの変化を明らかにすることを目的とした。

本研究の成果は, パーキンソン病患者が, 疾患が進行しても自分らしい生活を送るための支援及びパーキンソン病看護や在宅生活支援への今後の示唆に繋がると考えている。